神戸市総合基本計画審議会　第 2 回市民生活部会 議事要旨

日時：平成 21 年 10 月 7 日（水）　14：00～16：00
場所：三宮研修センター　7 階 705 号室
出席委員：松原部会長ほか委員 16 名
【議事要旨】
・　松原部会長の挨拶のあと、事務局より、前回議事についての確認が行われた。
・　松原部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である審議資料（資料４及び５）について事務局より順次、説明が行われ、審議された。
（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

【議題：前回議事についての確認】
前回議事については、承認
【議題：子育てを家族と社会全体でささえる】
（少子化について）
・少子化の原因は、晩婚・非婚だけでなく、子どもが苦手であるとか、経済上の問題、将来の心配、あるいは個人の生き方として、子どもが欲しくないという人が増えていると思う。
・今は子どもについて学ぶ機会が失われ、子どもを産み育てる自信、“育児性”（子ども、子育てに対する肯定的な感情や意識）が持てなくなっている。
小学校高学年から中学までぐらいで、子どものかわいさが伝わり、かまってやりたいという気持ちが育つようなふれあいを増やしてほしい。また、親子や異性に関する踏み込んだ学習の場づくりも必要であると思う。
・子どもが欲しくても持てない人もいる。不妊治療について、公的助成など、社会全体で理解を深めてほしい。
（地域子育て支援について）
・児童館やサークル、ファミリー・サポート・センターなどの地域の子育て支援について、もう少し定期的に、実際に子育て中の人の意見を聞くなどして、施策の改善を図ってほしい。
・地域で子どもを育てるというのは、保育所や幼稚園など各施設が地域ボランティアを積極的に導入するなどしないと難しい。子どもを対象にした犯罪などがあり、保育所や幼稚園は部外者が入れないように囲われている感じがする。
・様々な世代の人材確保が大事で、シニアの力は大きい。地域デビューのきっかけづくりや、情報が皆さんに届く仕組みづくりを進めてほしい。
・地域で育てる中で、「預かりたい」「預けたい」ということはどうしても出てくる。事件や事故等の問題はあるが、もっと大らかな社会環境をつくっていきたい。
（家庭・家族、社会規範等について）
・家族、家庭を社会がどう支えるかが重要。ワーク・ライフ・バランスもそうだが、本来、子育ての中心は家庭であって、責任ある保護者が家で育てるのがベストと思う。子育て支援の制度が充実することが、親・保護者が見ない時間が長くなってしまうと、本末転倒しないか。

・しつけのあり方を考えるべきであり、社会規範を学ぶことも大切と思う。
・子育ての基本は家庭であり、ＰＴＡでは「親学」に取り組んでいる。私たち親が変わらなければ、環境を変えることはできないのではないか。あまりにも支援施策に頼りすぎて本当に自分たちがすべきことを見失っているのではないかということをみんなで考えている。
・子どもは親や先生の姿を見ながら、場の中で成長していく。幼児期の中で、親と生活をともにする時間が長ければ、親のアイデンティティや思想性、価値観、規範意識などを知らず知らず獲得していく。低年齢のときに保育所に長時間預けて、親があまり介在しない時間が増えていくということが本当にいいのかどうか。
・子育て支援の中で、不満要因をどんどん取り除いていくという施策が多いが、ストレスの軽減にはなっても、親として子育てに関する満足、充実感は感じられないのではないか。
・しつけは、相手に不快感を与えないマナーを学ぶことであって、しつけがきちっとされていないと、成長すればするほど、対人関係がうまく図れないということが出てくる。地域の中での関係性、絆を強め、地域の中で育てていくということが大切。

（保育所・幼稚園等について）

・保育所入所について、4 月から仕事が決まっても、3 月まで保育所に入れるかどうかも分からないようでは女性が正社員として働くのは難しい。延長保育や土日祝日の保育も必須だと思う。
・3 歳未満の子供を持つ母親の在宅率が非常に高いようだが、働きたいのに働けないのかどうか背景のさらなる分析が必要と思う。
・子育ての施策体系は厚生労働省と文部科学省の縦割りが強く、幼稚園などと NPO、地域とが話し合う機会もない。各種団体のネットワークによる経験や課題の共有化に力を入れてほしい。
・保育園に比べて幼稚園は公的補助が少ない。認定こども園などの施策が具体的には出てきているが、実際には幼稚園から認定こども園になろうと思ったら、非常にハードルが高い。

（障害児施策について）

・将来、子どもたちが住みなれた地域で暮らすという視点に立って考えたときに、障害者が地域の方々に慣れてもらうということが大切である。施設という限られた世界だけでなく、地域で、小さいときからまわりの子どもたちと一緒に育ち、将来、地域で皆さん方に守られ、できないところを支援されながら、グループホームやケアホームで暮らすという形を目指したい。
・発達障害の子どもたちが、それぞれ自分たちの能力を伸ばしていくという部分では、個別指導なども大事だと思うが、やはり社会の中で育てるという部分が重要である。
・自分の子どもが、発達障害も含めて、障害があるということを受け入れることにかなり時間がかかると思う。そういう中では、発達障害支援にまだ足を運べないという親御さんも多いので、子育て支援全体の中で育てていくという施策も必要だと思う。
・発達障害支援について、相談窓口になる方の専門性がとても必要になってくると思う。児童館などについても、窓口の方々の専門性の向上が急務ということを入れてほしい。

（「めざす将来の姿」について）

・書かれていることに何の異論をはさむ気持ちはないが、どんな人に育てたいか、どういう人にその人らしく神戸に貢献してほしいかというところが欠けていないか。人をどのように育てていくかという理念というものをここに織り込む必要があるのではないか。

・組織の構成の人間の一番大事な部分は、組織に対する感謝の念といったものが一番ベースになる。それは実は家庭でしか芽が植え込めないものである。また、感謝の念の上に誇りというものが当然ついてくる。地域や国、自分に対する誇りなどの理念を大事にしていかないといけないのではないか。
・今後議論をまとめていくときには、「めざす将来の姿」の事務局仮案で示されているようなことが実際とはどれだけ乖離しているか、それをこれに近づけるようにするためにはどういう提案をしたらいいのかということをまとめていくとよい。
・どんな状態が子どもの目線に立って望ましいのかという基準、そして、ひいてはその延長線上の大人像ということに関して、例えば、子供の権利条約を国も批准しているので、そこで描かれている子どものあるべき姿が、どの程度まで今の施策の中で対応できているのか、何が課題なのかを見ていくということは、ある種の子ども像をクローバルスタンダードに照らし合わせて、神戸はどの辺りにあるのかということをチェックしていくという意味で、客観性の担保がある手だての一つかもしれない。

（その他の子育て支援策等について）

・妊婦健診について、保険が適用できるようにしてほしい。
・母子家庭への支援事業は多いが、最近増えてきている父子家庭への支援が抜けているのではないか。
・新生児訪問の中でマタニティブルーになられた方を一早く発見し、専門的なサポートをして虐待が減少した市もあり、そうした取り組みも必要である。
・病児・病後児の部分が余り具体化できていないのではないか。「病児・病後児サポートネットワーク事業」というところに神戸市は入っていない。ファミリー・サポート・センターでは対応困難であったので、やはり専門職をうまく活用されることも必要ではないかと思う。
・市内企業に両親がパートタイムで働きつつ一定の収入を維持する制度づくりのような取り組みを頼むなど、社会構造にかかわる違う観点からの働きかけがあってもよいのではないか。
・事業所の中には、福利厚生で時間と費用の保障をされていて、それは介護に使ってもいいし、育児にも使ってもいいという事業所もあると聞いているので、そこも少し進めてみてはどうか。
・神戸市内にひとり親家庭はどれぐらいあるか、支援が必要な人に届いているかなどの課題がある。毎日の生活に追われている人の意見や経験を聞く機会をつくってほしい。

【議題：ともにささえあう社会をめざす】

（外国人への対応について）

・外国人籍市民に対する視点を織り込む必要がある。その際には、外国市民の文化性への理解を広めて、深めていくことが必要である。また、地域の外国籍市民のコミュニティやＮＰＯとの連携や共助を進めるなど、外国籍市民へのサポートを一層推し進めていくことが必要である。
・各区役所での電話通訳事業について、試験的に始まった同行通訳システムをさらに一歩発展させ、区役所窓口に通訳者を常駐させていただくことも検討していただきたい。

（障害者対策について）

・20年ぐらい前にアメリカの人たちが、障害者について「ハンディキャプド」とか、「ディスエ

イブル・パーソン」というネガティブな呼び方をやめようということで、いろいろな言葉を生み出した中の一つが、挑戦という使命やチャンスを与えられた人であるとか、人にはすべて自分の課題に向き合う力が与えられているという理念を盛り込んだ「チャレンジド」という言葉である。

・「ともにめざす将来の姿」に、「健やかに安心して尊厳をもって生活し続ける社会をめざす」とある。家族からも周囲からも必要とされることが尊厳の第一歩であり、持てる力が尊ばれて、はじめてその力が発揮できる、そして尊厳をもって生きられるのだというのを入れることで、一方的にささえるだけでなく「ともにささえあう」という大きなタイトルにつながる。

・一人ひとりの人間の持っている可能性にどのような形で光を当てていくか。市民と事業者と行政がいかに協働でそういう条件づくりができるか、そのためには何をすべきかというのをこの計画で書き込む必要がある。

・障害者に対して、今、まだ日本の国は批准をしていないが、障害者権利条約が国連で採択をされている。そういった一つのグローバルスタンダードみたいなところから、神戸市として、障害者にとって一番生活しやすい、安心して暮らしていける、尊厳を持って暮らしていける、そういった社会をどうやってつくっていくのか、そういった視点をどこかに入れていただきたい。

（高齢者の扱いについて）

・「高齢者・障害者」と、ひとくくりの形で書かれている。当然似通ったサポートをしなければいけない部分もあるとは思うが、本当は少し違った視点からの整理が必要であると思う。高齢者の中にも、支援を必要とする人とそうでない人がいて、さらに、支援を必要とする人たちの中にも、チャレンジしている高齢者もいる。その辺りの差をきちんと分けて考えていく必要があるのではないか。

・後期高齢者を対象にした介護保険に関するアンケートを実施されていると思うが、それを整理すると、同じ後期高齢者の中でも神戸市内でどれだけの人が介護を必要としていて、どれだけの人が後期高齢の中でも介護も何も必要ないかという区別ができるのではないか。

（その他）

・ワーク・ライフ・バランスがどのように進められているのか知りたい。

・東灘での先進的な徘徊老人のＳＯＳネットワークのモデル事業をしっかり踏まえた上で、きっちりしたビジョンを出してほしい。

・神戸のこの地で、これが主にこれから先大事になるだろうという視点が余り見えてこない。

・「ともにささえあう社会をめざす」という言葉は非常にきれいであり、将来的には、ある程度行政はしっかりして、さらに足らずを補うような形で任意団体なりＮＰＯがそれをささえあうというという形が本来であることはよく分かるが、今のこの神戸の地で果たして既にそういう状況になっているのかどうか、少し自信がない。

意見用紙による委員追加意見について

〇大森綏子委員（兵庫県看護協会会長）

・４　ともにささえあう社会をめざす

課題について

高齢化、障害者について述べられているが、がんのターミナル（グループホーム）・難病についてはどのように考えていくのでしょうか。

長田区の方で個人でターミナルグループホーム（５Bed）を持ち活動している人がいますが好評です。地域の中でその人がその人らしく尊厳を持って生活していかれることを支えるには必要なことと思います。